

高齢者の居住環境と well-being に関する研究

—地域在住の 70 歳高齢者を対象にして—

松原 由季

日本では、高齢者に対する福祉施策として、施設サービスから在宅サービスへの転換が進められている。高齢者の在宅期間が延長していること、高齢者は環境からの影響を受けやすいこと、人と住居の間には心理的な結びつきがあることなどの理由から、高齢者にとって居住環境が重要であることが考えられる。このような背景から、本研究は、高齢期における居住環境が well-being に与える影響を検討することを目的とした。具体的には、保健性、利便性、安全性、帰属性の側面から居住環境を評価し、感情的 well-being にどのような影響を与えるのかを検討した。

居住環境の保健性とは温熱環境や騒音など、居住者の健康への影響に関する側面、利便性は居室構成と位置関係および広さと使いやすさに関する側面、安全性は日常生活（特に移動時）の安全性と非常時の安全性に関する側面、帰属性は住宅の所有性、愛着性の発揮・表現可能性、プライバシーなどに関する側面である。

地域の一般住宅に在住の 72-74 歳の高齢者を対象に、会場招待調査を実施し、居住環境に関する半構造化インタビューと質問紙調査を行った。調査内容は、基本属性として性別、教育年数、主観的経済状況を、居住状況として住宅形式、同居形態、部屋数、居住年数、改修経験、家満足度を、居住環境の指標として居住環境評価尺度を、well-being の指標として感情的 well-being 尺度短縮版を測定した。回答に欠損がある者を除き、194 名のデータが得られた。

まず、居住環境評価尺度の下位因子である保健性、利便性、安全性、帰属性の合計得点と、感情的 well-being 尺度の下位因子であるポジティブ感情、ネガティブ感情の合計得点を求めた。つぎに、基本属性、居住状況、居住環境評価、感情的 well-being の相関分析を行った結果、感情的 well-being の下位因子であるポジティブ感情と相関関係があるのは、性別、主観的経済状況、家満足度、保健性、安全性、帰属性であり、ネガティブ感情と相関関係があるのは安全性だけであった。居住環境が well-being に与える影響を検討するために、ポジティブ感情、ネガティブ感情を従属変数とした階層的重回帰分析を行った結果、ポジティブ感情には居住環境の保健性・安全性・帰属性が独立して影響を与えることが示されたが、ネガティブ感情には居住環境は影響を与えないという結果になった。さらにポジティブ感情については、パス解析を行い、居住環境、家満足度、ポジティブ感情の因果関係を検討した。その結果、保健性と安全性はポジティブ感情に直接影響を与え、利便性は家満足度を介して影響を与え、帰属性は直接の影響と家満足度を介した間接的な影響の両方があることが分かった。居住環境の 4 側面がポジティブ感情に与える影響の大きさは、大きい順に帰属性、保健性、安全性、利便性となった。

結果から、高齢者の居住環境が well-being のポジティブ感情に影響を与えること、中でも帰属性の影響が大きいことが示された。帰属性は、住居が居住者の心的拠点であることを表す側面であり、住居へ愛着を感じていること、現在の住居に住み続けられること、住居内に個人の家や家族・友人との交流の場があることが、well-being の向上につながることを示唆された。住居の機能的側面である保健性、利便性、安全性に関しても、well-being のポジティブ感情に影響を与えるという結果から、高齢者の居住環境には重要な要素であるといえるだろう。（臨床死生学・老年行動学）